

保育者養成におけるピアノ教育に関する一考察

吉村 淳子*

新見公立短期大学幼児教育学科

(2013年11月13日受理)

本研究は、幼児教育学科33期生に対して保育実習で行う音楽活動について、保育実習Ⅰと保育実習Ⅱを縦断的に調査することにより、授業で習得した音楽的能力がどの程度発揮されているのかを明らかにし、今後のピアノ教育内容を検討することを目的とした。

その結果、学生自身の音楽的技術力の向上が必要なこと、さらに、保育現場での子どもに対する指導方法や適切な教材を選択できる力が必要であることが明らかになった。

今後、ピアノ教育において、演奏技術の指導のみならず、子どもに対する歌の指導法などを含んだ教育方法および指導方法についての授業内容を継続的に研究していくことが課題であると考えられる。

(キーワード) 保育者養成, 保育実習, 音楽活動, ピアノ教育

I. 目的

保育者にとってピアノの演奏技術は、子どもと一緒に楽しい音楽を体験するための手段である。単にピアノを弾くだけではなく、幼児教育の内容に則したピアノ奏法が必要であり、そのための教育が要求されている。さらには、どのように子どもに音楽を与え、指導するかという側面もあり、幅広い音楽の教育内容が要求される。

本学では幼稚園教諭免許、保育師資格取得のため、「音楽Ⅰ・器楽Ⅰ」「音楽Ⅱ・器楽Ⅱ」「基礎音楽Ⅰ」「基礎音楽Ⅱ(声楽)」「幼児音楽Ⅰ」「幼児音楽Ⅱ」など、音楽関連の科目6科目を設けている。それらの科目を通して、子どもの豊かな感性を育み、主体的な活動を促すために必要な音楽的技術・能力・知識を習得させることを目的として教育を行っている。

学生が習得した音楽的能力が最初に試されるのは、保育実習の場である。その保育実習において、授業で習得した音楽的能力がどの程度発揮されているのだろうか。

本研究では、幼児教育学科の33期生を対象に、1年次後期(10月)に実施される保育実習Ⅰと2年次前期(7月)に実施される保育実習Ⅱを縦断的に調査することにより、学生の音楽活動に対する意識の変化を検証し、ピアノの教育内容を検討することを目的とした。

II. 研究方法

調査対象: 新見公立短期大学幼児教育学科 33期生 46名

調査日時: 2012年11月および2013年8月

調査方法: 質問紙によるアンケート調査

統計的処理: カイ二乗検定を用い、有意水準を5%以下とした。

倫理的配慮: 対象者に研究の趣旨と研究以外では使用しないことを説明し了解を得た。

III. 結果

1. 実習で音楽活動をしたか

表1に実習で音楽活動をしたかについての結果を示した。音楽活動を「した」が保育実習Ⅰでは64.7%、保育実習Ⅱでは78.3%となっており、どちらも「した」が多くなっていた。保育実習Ⅰでは($\chi^2(1) = 5.565, P \leq 0.05$)、保育実習Ⅱでは($\chi^2(1) = 14.739, P \leq 0.05$)とそれぞれ多くの学生は音楽活動を経験しており、両実習間では同じような傾向であった。

表1 実習で音楽活動をしたか (%)

	保実Ⅰ	保実Ⅱ
した	67.4	78.3
しなかった	32.6	21.7

2. 保育実習で行った音楽活動

表2に保育実習で行った音楽活動についての結果を示した。保育実習Ⅰでは、「音楽に合わせて動く」が40.4%で最も多く行った活動であった。次に「歌唱活動」が35.1%となっており、この2つの活動が中心であった。保育実習Ⅱでは「音楽に合わせて動く」が52.5%と最も多い

*連絡先: 吉村淳子 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

活動となっており、保育実習Ⅰと保育実習Ⅱは共に同じ傾向であった。保育実習Ⅰ ($\chi^2(5) = 46.234, P < 0.05$)、保育実習Ⅱ ($\chi^2(5) = 76.139, P < 0.05$)ともに有意であった。

表2 実習で行った音楽活動 (%)

	保実Ⅰ	保実Ⅱ
ア. 歌唱活動	35.1	30.5
イ. 楽器でリズム遊び	7	10.2
ウ. 楽器合奏	7	0
エ. 音楽に合わせて動く	40.4	52.5
オ. 手作り楽器	7	3.4
カ. その他	3.5	3.4

3. 音楽活動で特に難しいと感じたこと

表3に音楽活動で特に難しいと感じたことの結果を示した。保育実習Ⅰでは、「子どもの様子を見ながら弾く」が17.7%、「歌をうたうこと」が13.9%、「年齢に合った活動」が13.9%と多くなっていた ($\chi^2(12) = 42.46, P < 0.01$)。保育実習Ⅱでは、「年齢に合った活動」が16.7%、「年齢に合った選曲」が15.6%「子どもの様子を見ながら弾く」が14.4%と多くなっていた ($\chi^2(12) = 46.355, P < 0.01$)。これについても、保育実習Ⅰと保育実習Ⅱで同様の傾向であった。

表3 音楽活動で難しいと感じたこと (%)

	保実Ⅰ	保実Ⅱ
ア. ピアノを弾くこと	11.4	5.6
イ. 歌をうたうこと	13.9	10
ウ. 子ども様子を見ながら弾くこと	17.7	14.4
エ. 間違えないように弾くこと	11.4	7.8
オ. 子どもに合わせて弾くこと	6.3	10
カ. 音楽的に表現すること	1.3	2.2
キ. 楽譜のない曲を弾くこと	1.3	1.1
ク. 楽器遊び	0	3.3
ケ. 楽器遊び	1.3	0
コ. リズム遊びの指導	7.6	11.1
サ. 年齢に合った活動	13.9	16.7
シ. 年齢に合った選曲	10.1	15.6
ス. その他	3.8	2.2

保育実習Ⅱでは、「年齢に合った選曲」が保育実習Ⅰと違って挙がっていることと「歌をうたうこと」が有意に挙がっていないことが相違点といえる。

4. 音楽活動をするために必要だと思うこと

表4に音楽活動をするために必要だと思うことの結果を示した。この項目も保育実習Ⅰと保育実習Ⅱでは同様の傾向であった。保育実習Ⅰでは「子どもを見ながら弾く」が23.6%が多くなっており、ついで「ピアノで臨機応変に対応する」が16.9%、「曲目のレパートリー数」が16.9%、「大きな声で弾き歌い」が14.6%と多く選択されて

いた ($\chi^2(9) = 57.02, P \leq 0.05$)。また、保育実習Ⅱでは「子どもを見ながら弾く」が26.9%最も多く、次に「曲目のレパートリー数」が20.2%、「大きな声で弾き歌い」が16.3%、「ピアノで臨機応変に対応する」が13.5%となっており、保育実習Ⅰと保育実習Ⅱでは大きな違いは認められず同様の結果であった ($\chi^2(9) = 75.81, P \leq 0.05$)。

表4 音楽活動するために必要なこと (%)

	保実Ⅰ	保実Ⅱ
ア. ピアノが上手に弾けること	9	1.9
イ. ピアノで臨機応変に対応する力	16.9	13.5
ウ. 子どもを見ながら弾くこと	23.6	26.9
エ. 曲目のレパートリー数	16.9	20.2
オ. 大きな声で弾き歌いをする	14.6	16.3
カ. 音楽の表現力	3.4	8.7
キ. 楽譜がなくても弾ける力	5.6	1
ク. 楽器の扱い方	5.6	6.7
ケ. 歌の指導法	3.4	4.8
コ. その他	1.1	0

5. 自分の行った音楽活動の満足度

表5に自分の行った音楽活動の満足度についての結果を示した。保育実習Ⅰでは「思うようにできなかった」が57.7%と半数以上の学生が十分な活動ができなかったとしている。次に「まあまあ満足」が38.5%となっていた。保育実習Ⅱでは「まあまあ満足」が44.4%、「思うようにできなかった」が41.7%となっており、保育実習Ⅰ ($\chi^2(3) = 24.154, P < 0.01$) 保育実習Ⅱ ($\chi^2(3) = 18.889, P < 0.01$)で、保育実習Ⅰと保育実習Ⅱは同様の傾向といえる。

表5 音楽活動についての満足度 (%)

	保実Ⅰ	保実Ⅱ
ア. 満足	3.8	8.3
イ. まあまあ満足	38.5	44.4
ウ. 思うようにできなかった	57.7	41.7
エ. 思うようにできなかった	0	5.6

6. 音楽活動する上で不足していると思うもの

表6に音楽活動する上で不足していると思うものについての結果を示した。保育実習Ⅰでは、「歌のレパートリー数」が25.3%、「弾き歌いの技術」が21.1%、「ピアノの技術」が20%となっていた。また保育実習Ⅱでは、「歌のレパートリー数」が17.6%、「ピアノの技術」と「弾き歌いの技術」がともに16.9%となっており、どちらの実習でも「ピアノの技術」「歌のレパートリー数」「弾き歌いの技術」を有意に選択していた (保育実習Ⅰ $\chi^2(3) = 18.889, P \leq 0.05$, 保育実習Ⅱ $\chi^2(9) = 50.38, P \leq 0.05$)。

しかし、この質問では、保育実習Ⅱで、「歌の指導法」12.2%、活動のアイディア」10.8%、「音楽的な応用力」10.1%などの多くの項目に反応しており、保育実習Ⅰとの間に有意な差があった ($\chi^2(1) = 11.56, P \leq 0.05$)。これ

は、2年生になった学生の問題意識の高まりとも要求水準の上昇とも解釈できそうである。

表6 音楽活動する上で不足していると思うもの (%)

	保実Ⅰ	保実Ⅱ
ア. ピアノの技術	20	16.9
イ. 歌のレパートリー	25.3	17.6
ウ. 楽器に関する知識	7.4	6.8
エ. 弾き歌いの技術	21.1	16.9
オ. 活動のアイデア	8.4	10.8
カ. 音楽的な応用力	8.4	10.1
キ. 歌の指導法	3.2	12.2
ク. 楽器活動の指導法	5.3	6.8
ケ. 特にない	0	0.7
コ. その他	1.1	1.4

IV. 考察

保育実習Ⅰと保育実習Ⅱにおける音楽活動についての意識は、実習時期が違っていても同様であったが、「音楽活動を行って難しいと感じる」と「音楽活動をする上で不足していること」の2項目には、やや傾向に違いが認められた。

全体的な音楽活動に対する意識は、内容水準に違いはあろうと思われるが、実習の時期には関係ないといえよう。

保育実習Ⅰと保育実習Ⅱとで相違点のあった項目について、「音楽活動を行って難しいと感じる」ものに、保育実習Ⅰでは挙がっていない「年齢に合った選曲」が保育実習Ⅱで挙げられていたことである。これは、保育実習Ⅰの段階では、自分で選曲して音楽活動することはなく、活動の一部として実習園で指示された曲目で活動を行うものと思われる。保育実習Ⅱになると実習内容もより具体的な内容が求められ、学生が自ら内容を企画し実践する機会が増えるためと考えられる。近年、子どものための曲は大変多くの本が出版されており、従来の子どもの歌に加え、時代に合った新しい歌やテレビ番組やアニメなどの曲などさまざまな曲がある。これらの中から、子どもの年齢に即した身体的発達や心理的な発達などを考慮しながら、適切な曲を選ぶのは難しいと思われる。

次に、「音楽活動をする上で不足していると思うもの」では、保育実習Ⅰと保育実習Ⅱでは、ほぼ同様の結果になっていたが、保育実習Ⅱで「活動のアイデア」や「歌の指導法」「音楽的な応用力」など、多くの項目に反応している。これは、保育実習Ⅱになると学生自身が自分のことだけではなく、「対子ども」ということに関心が向くようになったこと、また実習での要求水準も高くなり問題意識が高まってきていると考えられる。

これらのことから、保育実習において音楽活動を行う上で学生にとって最低限必要なものは、ピアノの技術と歌をうたうという基本的技術といえよう。そして、学年が進むにつれて、「対子ども」という視点を持つことができ、適した教材で指導できる力が必要になるとの自覚がうまれてきているものと考えられる。

保育者養成において、これらの力をつけるためのピアノ教育を考える上で難しいことは、短期間で実践力を身につければならないことである。特に技術の習得には、時間がかかり、個人差が大きいものである。短大に入学してくる学生は、ピアノ未経験者からピアノ熟練者までさまざまである。

しかし、保育実習に出た時には、ピアノ熟練者も、習い始めたばかりの学生も同じ内容を要求されるのが現実である。特に保育実習Ⅰは、1年生の10月ということで、ピアノ初心者も、習い始めて半年しか経っていない状況である。ピアノの技術は、やっと簡単なピアノ曲が弾けるようになったところである。しかし、それでも実習では、こどもの曲の弾き歌いをしなければならない。この弾き歌いというのは、ピアノを弾きながら歌をうたうという演奏行為である。楽譜を見ながらやっとピアノを弾いている学生にとっては、相当難しいと思われる。ピアノ初心者が楽譜が読めるようになり、自在にピアノが弾けるようになるには、大変な努力と時間が必要なのである。

さらに、ピアノの熟練者である学生でも、弾き歌いを難しいと感じている学生はいる。ピアノが弾けることと弾き歌いができることは同じことではないのである。

昨年までの1年次の音楽Ⅰ・器学Ⅰ(ピアノ)の授業では、ピアノの基礎教本を使用してのレッスンであった。これには、「伴奏をつける」とか「伴奏を弾きながら歌をうたう」などは含まれておらず、ひたすら指が動くようになるための練習をすることになる。

しかし、この練習方法では、実践力をつけるまでには相当の時間が必要になり、保育実習Ⅰにおいて音楽活動をすることに対応できない学生もいる。そこで、今年の入学生(34期生)から、初心者に対して、最初から両手での練習から入り、同時に簡単なコード伴奏の知識と伴奏づけの技術などが取り入れられている「大人のためのピアノ教本」¹⁾に変更したところである。もちろんピアノ初心者には、基礎的な指の練習が最重要である。この技術を習得しなければ、次の段階には進めない。しかし、初心者にとって先の見えない果てしない練習を強いられることは、辛いことであろう。

初心者の学生に、少しずつでも「弾けるようになっていく」という実感を持たせながら、具体的な目標を持たせることが必要である。例えば、前期で1~3ステップ、後期で4~6ステップを終了するというように、短期目標を設

定し、学習の意図と習得すべきポイントを明確にすることが重要である²⁾と考える。

そして、それを達成していくことで、次の段階の保育実践力に結びつく「弾き歌い」などができるようになるという実感を持たせるのである。ピアノが苦手な学生は、できないことばかりがクローズアップされ、苦手意識を強くしていく傾向にある。ピアノ初心者でも、こどもの歌の伴奏ができ歌もうたえるということを実感させていくことが必要であるのではないだろうか。この「できる」という実感を持ち、達成感を味わえることが、学生自身は意欲を持つこととなり、さらなる技術の習得へと要求水準をあげることに繋がるのではないかと考える。

また、2年生のカリキュラム内容である「弾き歌い」については、前回の調査³⁾から学生自身が弾き歌いのレパートリー数が少ないと感じているという結果をもとに、授業内容に改善を加えた。

本年度から、2年次の「幼児音楽Ⅰ」「幼児音楽Ⅱ」の授業でそれぞれ20曲の子どもの曲を提示し、最低その中の10曲は必ず合格するというノルマを課すこととした。これで、1年間で最低20曲はマスターすることになる。ここで1年間に提示する40曲は保育現場では定番と思われる曲であるが、子どもの歌のほんの一部にすぎない。どんどん新しい曲が生まれている現代において十分とはいえないが、しかしこれらの曲を基礎とし、学生時代になるべく多くの子どもの曲を習得させることが重要であろう。

現場に出てからは、実際には仕事の準備やその日の仕事を行うだけで精いっぱいであり、新しい曲の練習をするという時間はなかなかとれないのが現実である。そのため、学生の間になるべくたくさんの曲を知り、歌えるように、弾けるようにしておくことも重要と考える。

これらの技術面に加えて「歌の指導法」や「教材の選曲」などについても授業内容に加える必要があると考える。子どもの年齢に合った曲を選択し、より充実した活動にするためにどのように指導していくかということは、保育をするうえで重要な要素である。これについては、今後の授業内容の工夫改善が課題である⁴⁾と考える。

文献

- 1) 橋本晃一：おとなのためのピアノ教本1・2，ドレミ楽譜出版社，2011
- 2) 嶋田由美：保育者養成におけるピアノ教育[1] ～指導のポイントを明確にした教材編成～，日本保育学会大会研究論文集48，644，1995
- 3) 吉村淳子：保育者養成におけるピアノ教育についての試み ～学生へのアンケート調査から～ 新見公立大学紀要33，87-92，2012